



# 左遷も悪くない 1

ALPHABET

霧島まるは  
Maruha Kirishima



アルファイト文庫 

目次

本編  
7

番外編  
イレネオの見た男  
291

# 主な登場人物

ジャンナ・アロ 16歳

ウリセスの妹。  
甘ったれのわがまま娘。

ランベルト・アロ 31歳

ウリセスの兄で、  
実家の商家を継いでいる。

ウリセス・アロ 28歳

実直すぎてド田舎に  
左遷された主人公。  
眼光鋭い優秀な軍人。

トビア・コンテ 26歳

コンテ家長男。  
役人だが、予備役でもある。

ヴァレリア・アロ 22歳

ウリセスに嫁いだ貞淑な女性。  
父の命を助けたウリセスの話を  
繰り返し聞かされて育った。

イレネオ・コンテ 20歳

コンテ家三男。  
体力も剣もそここの兵士。  
兄弟で一番空気が読める。

セヴェーロ・コンテ 19歳

コンテ家四男。  
ウリセスに憧れて軍人となったが、  
体力が無い。

ルーベン・コンテ 25歳

コンテ家次男。軍の小隊長。  
剣の腕は見事だが、  
それ以外は多くの難あり。

## 序 左遷された男

ミルグラーフ王国。

大陸の西部に位置するこの国は、政情の安定した中堅国のひとつであった。しかし、それがいつしか時勢と周辺諸国との関係により、広く豊かな北東部へと進軍する拡張政策へと移行し始める。後方の小国群の国力を抑え、歯向かわぬ隣人として困い込む外交手腕と、訓練の行き届いた質の良い兵のおかげで、その政策はおおむね順調だった。

しかし、同じく拡張政策を取る同程度の国力のベキア王国と国境を接した時から、膠着状態に陥ることとなる。お互いを睨み合いながら、間の小国を刈り取るように奪い合い、接する国境線が長くなればなるほど、ミルグラーフとベキアの軋轢は高まった。

やがて当然のように両王国の戦いが起き、互いに大勝することも大敗することもなく、国境線の小さな描き換えが行われる程度の戦いによって、多くの命が失われた。

ある意味でお互いをよく知り合うこととなったこの二国が、初めて休戦協定を結んだのは、つい一年半前のこと。八年もの間、断続的に、しかし熾烈に行われた殴り合いの末の

着地点だった。敵の拳の痛みを知ることで、喧嘩をするには割に合わない相手という認識を、ようやく互いに得たのだ。

ミルグラーフ王国はこれにより、休戦という名の内政再建期間を手に入れた。

しかし、この休戦が恒久的のものであるとは、誰一人として考えていない。再びどちらかが傷を負うことをも辞さない野心を抱くまでの、不安定なものでしかないと理解している。だからこそ、軍の再編と兵の錬度上昇も必要とされた。戦争の間、前線に集結していた有能な将校たちも、一度中央に呼び戻され、それぞれ能力に応じて各地域へと配属されることとなった。

そんな中、一人の将校の運命が決まる。先の戦争において多くの戦功を得たその経歴は、誰が見ても彼の将来は明るいと思えるものだった。

そんな男に差し出された辞令は、ベキア王国との国境とは一番遠い南西部に、最高指揮官である連隊長として赴任すること。

要するに——左遷、だった。

左遷された男の名を、ウリセスIIアロという。

黒く短い髪に、目つきの悪い濃い茶の目。背は高くも低くもなく、がっしりとはしているが、筋肉ダルマというわけでもない。

士官学校を十八歳で卒業してから二十八歳になったいままで、そのほとんどの期間、ウリセスは戦場に身を置いてきた。そして鬼神のごとき強さを発揮し、一足飛びに出世した後、その頭を中央の貴族達に金槌でぶん殴られたのである。

賄賂も贈らない、媚びへつらいもしない。上官の指示が阿呆なものであれば、何のためらいもなく「味方の兵を殺す趣味でもあるんですか?」と言い放つ彼は、ベキア王国との戦争が終結した途端、山手の平穏な地域の連隊長として、見事に追い払われたのだ。

誰かを睨んでさえないなければ、人波に埋もれて分からなくなる容貌の彼も、楽しみの少ない田舎の連中の噂の的となり、またたく間に顔を覚えられてしまった。

噂というものは、尾ひれがつきまくるのが世の常だ。「都で、貴族を半殺しにしてここに流されたらしい」だの、「しごきが酷く、何人もの部下を訓練で使い物にならなくした」だの、一割の真実と九割の誇張が、ウリセスをひどい男として装飾した。

更に、脳内が鋼で出来ている彼は、愛想もよくなく誰に対しても態度を大きく変えることがなかった。それが噂に真実味を加え、あつという間に部下からも町の人間からも距離を取られてしまった。

だが、それは別にこの町に限ったことではない。実際は都にいた時も似たようなものだった。ただし、都は人口が非常に多いため、彼のことを知らない者も多く、頓着とんちやくされない場合があっただけだ。

長く付き合った部下はウリセスのことを理解して、全身全霊を懸かけて、彼の高い要求にも応えてくれた。だが、そんな彼らはみな優秀なため、見事に全員、都に残された。

誰か一人でも一緒に来ていれば、ここまで悪い噂が広まることはなかっただろう。上官の誤解を払拭ふしよくすべく、奔走ほんそうしてくれたに違いない。事実、彼の階級であれば補佐の一人や二人、同行させるのは難しい話ではなかった。しかし、それはウリセス自身が望まないことだったのだ。貴族なんでものを目をつけられて干されるのは、自分ひとりで十分だった。

その結果、彼はここで人間関係の構築を一から始めなければならなかったのである。それは、一朝一夕いちじゅういちじつに出来るものではなかった。

だが、そんな時間のかかるものよりも、ウリセスには優先すべきことがあった。

兵を鍛えることである。部下をしごき、己にはさらに厳しい鍛錬たれんを課しながら、ウリセスは人間関係以外の日々を、充実させた。どこにいても、結局やることは一緒の男だった。

そんな男の元に、「縁談えんたん」なるものが舞い込んできた時、彼は何の冗談かと思った。

この町に住む、普通の家の普通の娘だという。彼の噂を知っていれば、百人中百人の娘が嫁よめぎたくないと言うだろうと考えていたので、誰かがからかっているのではないかと、ウリセスは訝いぶかしく思ったほどだ。しかし、紹介者は「相手方は本気だ」という。

ウリセスは二十八歳で、そろそろ嫁よめをもらわなければならない年ではある。実家の親から手紙が来るたびにうるさく書いてあるので、してもいいか、くらいには考えていた。ただ、そういう話が来なかっただけだ。

休戦により都に戻っていた間は、彼を目標めざしりに思っている貴族軍人におおっぴらに殺し屋でも送られかねない状態だったため、彼に娘をやるうなんて命知らずな人間はいなかったのである。ただ、そんな貴族の危険な嫌がらせも、左遷されてからはぴたりと鳴りを潜ひそめ、ウリセスの懸案事項を減らしてくれていた。

「分かった、相手がいいならいい」

珍しい申し出に、ウリセスは簡単に返事をした。

仕事と鍛錬が一番の男だったので、女に対する好みなどない。身の回りの世話をしてくれて、彼の血筋が絶えないように手伝ってもらえればそれでよかった。結婚とはそういうものだと、彼の価値観には刻きざまれていたのだ。

幸か不幸か左遷させんされたいまが、軍人人生の中で一番時間があり、なおかつ命の危険がな

かった。結婚するにしても、子供を作るにしても最適だと思われた。相手の名前や家柄などを書いた紙を渡されたが、ウリセスはろくに目も通さずに、再び訓練場に戻ったのだった。

## 1 結婚した男

ミルグラーフ王国の南西の国境近くに位置するレミニの町は、元々は平和的に王国に吸収された小国であった。両国は人種と宗教、更には言語を同じくし、非常に交易が盛んだったため、飢饉でレミニが危うくなった時、ミルグラーフが囲い込んだのだ。

それから大きな問題も起きることなく、既に五十年近い歳月が流れた。国主の血筋が、現在もそのまま領主であり続けているのもまた、この地域の平穏に貢献していた。

国境と言っても、レミニの町は南部と西部を除しい山岳に囲まれ、隣接している国もミルグラーフ王国の保護を受けてきた小国ばかりである。自然の防壁と優良な隣人。現在王国内では、最も安全な地域のひとつと言っているだろうか。ただし山岳の関係で、隣国との直接的な交易路はなく、南西の終着の地、という扱いだった。

そんなレミニの町で、本日ひとつの結婚式が執り行われていた。

主役は、今年の春に連隊長として赴任してきたばかりの——ウリセスニアロである。妻になる人間の、顔も名前も知らないままの結婚式だった。

ただし、さすがの彼も日付の確認と挨拶のために、結婚前に一度向こうの親とは会っていた。式は、軍の行事が何も入っていない秋の初めということですんなりと決まった。そして、この町の一般的な結婚支度金の額を聞き、相手方の親にそれに色をつけて渡したのだ。これで、結婚前のウリセスの準備はおしまだった。

元は軍人だったという足の悪い父親と、町の料理屋で働いているという母親は、「くれぐれも娘をよろしく頼みます」と、彼に言った。娘を嫁がせる親としては、ごくごく普通の言葉だろう。

しかし、不思議なことに彼らの目には、町に広まっているウリセスの悪い噂の色は見えなかった。知らないのであれば、よほど世間に疎い人間に違いないと彼は思ったが、自分からその話をするのも馬鹿らしいので、「分かりました」とだけ答えた。

式では、新郎も新婦もフードのついた長いローブを着ることになっている。男は青で、

女は白だ。多くの色を持つ空の神が、婚姻こんいんの際に「本当のあなたは何色でいらつしゃいますか」と妻となる女に問われ、「では青で」と答え、また「私はあなた様の何になればよろしいでしょうか」と女に問われた時、「では白い雲となれ」と答えたという神話に基づく古式こしきゆかしい色だった。

そんな新郎新婦の前で、神官が空の神の婚姻と同じ形で式を進めてゆく。これまで一度も顔を合わせたことのないウリセスの妻となる女は、その間ずっと頭を下げていた。髪も結ゆっているようで髪の毛一本見えず、フードの中がどうなっているのか、彼にはさっぱり分からない。

ようやく式が終わると、新郎だけがフードを取ることが出来る。新婦の方はそんな夫に手を引かれて新居に入るまで、フードを取ることは許されぬ。

女性おんなは慎重しんじゆう深いのが一番であるという、古いしきたりとやらのおかげで、ウリセスは家までの道のりを、ほとんど何も知らない相手と一緒に歩くことになったのだ。

「あー、ウリセスニアロだ。よろしく頼む」

ロープ姿で町を歩かなければならないのは、なかなか拷問ごうもんである。何しろ、対つひのロープを着ているおかげで、彼らがいまま結婚式を終えた直後であることが、誰の目にも明らかだった。

しかも、ウリセスにはフードがない。あの悪名あくみょう高き連隊長が、どこぞの女と結婚したのだと、張り紙をして歩いているようなものである。これでは自ら新たな噂うわさの種をまき散らしているのと変わりなかった。

ウリセスは、隣の女を不憫ふびんだと思った。これから彼の悪い噂に振り回されることになるだろう。結婚前には、そんなことまで考えもしなかったが、こうして人々の不躓ふしつな視線にさらされていると、ウリセスは嫌でもそれを考えてしまう。

今だけでも、この女がフードをかぶっていられて良かったと、彼は思った。そう大きくはない町なので、顔を見ればどの誰かくらい、すぐに知られてしまうことだろう。

「……です、よろしくお願ひ致します」

消え入りそうな声が、隣から返ってくる。そう言えば、式で神官から結婚の確認をされた時も、こんな小さな声だった。小さすぎて、彼女が自分で言ったはずの名さえ、ウリセスは聞き取れなかったのだ。

ちゃんとメシ、食ってんのか？

彼は、軍という男だらけの職場に長いこと浸ひたかっていたせいで、こんな頼りない状態で大丈夫かと心配になる。そして、さすがに名前くらいは知っていなければならぬだろうと、彼は「何と呼べばいい？」と、握った手を軽く引つ張って問いかけた。それに釣つられ



たように、彼女のフードの下の顔がこちらに少し向く。白い顎が、ちらりとウリセスの視界で閃いた。

「レーアとお呼びください」

唇もまた、ウリセスの方を向いたおかげで、小さな声が何とか彼の耳まで届く。

レーアアロか、少し呼びづらいなど、彼は変なことを考えながら、「分かった」と答えた。

妻の名前が分かり、事前書類に目を通していなかった不具合が解消されたところで、彼らはようやく新居へとたどり着く。新居と言っても、元々ウリセスが住んでいた、軍から貸与されている指揮官用の官舎である。

この町がミルグラーフ王国に吸収された時に造られた、築五十年の建物だ。年月は経過しているが、古びて灰色がかった煉瓦の壁は、重厚さを醸し出している。客に見せるための表庭と、生活のために使う奥庭という二つの庭も、軍と家を往復するだけだったウリセスにとつては、剣の稽古に使う程度だった。

彼は、勝手知ったる玄関の鍵を無造作に片手で開け、もう片方の手で彼女を引っ張って家の中に引き入れる。ここまで、しきたり通り一度も手を離していないため、握った手の間に結構汗をかいていた。ウリセスは不快には思わないが、女の方も同じとは限らない。

「もう離していいのか？」

手を離すタイミングを掴みかねて、ウリセスは隣に問いかけた。戦場での戦い方は知っているが、結婚するのはこれが初めてなのだ。日ごろ無縁なしきたりを、きちんと覚えていくわけではない。

ウリセスのものよりも小さな手が、少し戸惑った動きをした後、彼女は「多分……」と小さく答えた。一応、玄関の扉をしっかりと閉め、それからようやく彼は、自分の妻であるレーアの手を離した。

「……」

「……」

外と比べ一段暗い玄関で、彼が黙って妻を見ると、彼女もまた黙ってそこに立ち尽くしている。自分から行動を決断して、キビキビ動くタイプではないようだ。ウリセスの言葉か行動を待っているのだろう。軍人であれば失格の態度だが、そんなものを女性に求めるのは野暮なことだった。

とりあえず、着慣れない長つたらしい青のローブに手をかけ、ウリセスはあつさりとしてそれを取り払った。下はいつもの軍服だ。襟元を飾るスカーフは苦手なので、公式行事以外はあまりつけることはない。今日もまたローブで隠れるからと、やっぱりつけていな

かった。

「ローブ、脱いたらどうだ？」

初秋しじゅうとは言え、まだ暑さは十分残っている。そんな時期にローブを着て歩いてきたのだから、彼女も暑いに違いないとウリセスは思ったのだ。

「あ、はい」

彼のものより白い手が、慌てたように自身のフードにかかる。

その指が。

ふわりと、頭を覆おおっていたかぶりものを、後ろへと落とす。

紅茶と同じ色の、赤茶の髪が最初に彼の目に留まった。長いだろうそれは、綺麗きれいに後ろでまとめられている。やせてほっそりした顔の女は、落ち着かない緑の目を細かく動かし、後、ゆっくりとウリセスを見上げた。

派手な顔立ちではない。彼女の気性きせうの大人しさがそのまま顔に出ているのか、少し困ったような眉まゆをしている。目が合うと、恥はずかしそうに視線を下げて、白のローブを脱ぎ始めた。白いブラウスに、胸の下からウエストまで広い範囲で絞しぼるタイプの長いスカート。

そんな彼女の全身を見て、ウリセスが一番最初に思ったのは——細すぎだ、というものだった。ゆつたりとしたローブで分からなかったが、絞られたそのウエストを見る限り、



ちよつとつづくだけで折れてしまうのではないかと思えるほどだ。ウリセスと同じ内臓が、その中に詰まっているかも怪しく見えた。

「ハラ、減ってるだろう？」

この細さでは、自分の妻として今後支障が出るのではないかと思い、ウリセスはそう彼女に切り出した。

式の前に、既に今日の夕食は届けられている。夫婦になつたばかりの二人は、これから明日の朝まで新居から出てはならないというしきたりがあるので、式の前に必要なものは運び込んであった。新郎と新婦以外の出席者は、今頃どこかの店で主役抜きの宴会をしているはずだ。

「あ、いえ……」

彼女は、小さく首を横に振る。曖昧な色を見せる緑の瞳の本当の声を、ウリセスは正しく拾えなかった。

式の都合で昼抜きだったため、ウリセスは十分に空腹だ。おそらく彼女も同じはずだが、素直に答えることはない。女が腹が減つたと言うのは恥ずかしいことだと疑られているのか、本当に食が細いのか。だが、どちらにせよ食事はすべきだという結論に、彼はたどり着く。

「俺は減っている。お前も食べた方がいいと思うぞ。そんな身体じゃ、子供を産む時に苦労する」

これでも、ウリセスは女性相手の、控えめな発言をしている方だった。相手が軍人であつたなら、低い声で「そんなナリで、兵士が勤まると思つてるのか？」と言っていたら、うから、相当の譏歩だ。

「こ、子供……そ、そうですね。頑張ります……」

彼の発言に、一度大きく戸惑つた顔をしたレーアは、その後ぼおつと赤くなり、もごもごと小さな言葉を返した。その声に恥じらいはあつても、恐れはない。ウリセスの悪名を、彼女の家族同様知らないのだろう——彼は、そう考えた。

「よし、メシだ」

話は決まった。

家のことを知らない彼女のために、ウリセスは先導して食堂へと向かう。

こうして、今日出会つたばかりの二人の夫婦生活が始まつたのだつた。

## 2 結婚した女

「俺の起床は、毎朝五時。剣の稽古をした後、七時から朝メシ。八時前には、出勤する。帰りは分らん。二十時過ぎてても帰らないようなら、先に晩メシは食っておけ。二十二時過ぎてても帰らないようなら先に寝ろ。翌朝五時に起きた時に、隣に俺が寝ていなければ泊まりだから、俺の分の朝メシはいらん」

食事をしながら、ヴァレーリアことレーアは、向かいの席の夫の言葉を、目を白黒させて聞いていた。新妻への甘い囁きなどウリセスに出来るはずはなく、まるで補佐官にでも告げるかのような伝達が、始まったのである。

食堂は広く、東と南の硝子窓により、外の光を取り込めるようになっていた。しかし、いまは夕刻。日差しは室内をしっかりと照らしてはくれず、食堂は微妙な薄暗さに包まれかけていた。大きなテーブルの上には、結婚を祝う食事が並べられている。その両側に用意されている六つの椅子の内、二つの椅子しか埋まらないのは、家族の多い家に生まれた彼女からすれば、少し寂しく感じるものだった。

向かいに座るウリセスアロという男の話を、レーアは結婚前に父から何度も聞いていた。彼は、軍人だった彼女の父の——命の恩人だった。

いまは休戦協定が結ばれた隣国との戦争の真つ最中だった七年ほど前、足をやられて前線で動けなくなっていた彼女の父を、上官である彼が担ぎ上げて助けてくれたのだ。敵は本当にすぐ近くにいて、もはやこれまでだと覚悟を決めていた父を背負いながら、彼はこう言ったという。

『負傷恩給でももらって、田舎でのんびり暮らせ』

力強いその声を聞いた時、父は自分が生きて帰れると確信し、足の痛みなど苦にならなくなったらと、何度も何度も家族に話して聞かせた。息子たちには強い男になれと言い、一人娘のレーアにも、嫁に行くならこんな強い男のところにしろと言った。

彼は、ウリセスの言葉通りに退役して都を離れ、一家全員で故郷のレミニの町へと帰ってきた。故郷と言っても、父が生まれ育ったところというだけで、母を含めてレーアたち家族は、みんな都の生まれだ。そのため、引越してきた当初は、知り合いといえれば父の関係者が少しいるぐらいで、彼女は心細い思いをしたものだった。

レーアが年頃になった頃、父はこの町でウリセスアロのような強い男を探し始めたが、なかなかお眼鏡にかなう男はいなかったようだ。

嫁ぎ先が決まらないまま、レーアも気づけば二十二歳になろうとしていた。このままで娘が嫁ぎ遅れになってしまいうから、少しくらい妥協してと母が父に詰め寄っているのを彼女も見たが、出来れば妥協はして欲しくないなとレーアは思っていた。何度も聞かされた父の記憶の中の男に、彼女なりの憧れが生まれていたせいだ。

そんなある日。父が、興奮した様子で家に転がり込んできた。文字通り、引きずった片足がそれに耐え切れず、玄関を開けるなりもんどりうって倒れたのである。仕事に出ていた母親に代わって家のことを切り盛りしていたレーアが、その大きな音に驚いて玄関へ駆けつける――

「き、来た！ 来たぞ、ウリセスニアロがこの町に！ ああ、ああ、これこそ神の御業だ！ まだ彼は独身だ！」

父は興奮のあまり、もはや手のつけられない状態で、ひたすらに感嘆の声を上げ続けた。連隊長として、彼がこの地に赴任してくと聞かされたレーアは、父と共にそれを喜んだが、そううまくいくものかと不安にも思っていた。そんな偉い人であるならば、結婚の話も引く手あまただろうと。

だが、そうではなかった。彼の町での評判はすこぶる悪く、都の厄介者が流されてきたというひどい噂ばかりだったのだ。

父の話との格差の酷さに、レーアは一体どっちが本当の彼なのか分からずに戸惑った。だが、彼女の父は、町の噂を全部でたらめだと言いつつ切った。気骨のある男で、貴族に対してもおべっかを使わないからこそ、こんな田舎に左遷されたのだと。

もし、再び大きな戦争が始まれば、中央は必ず彼を呼び戻す。それほど力を持った男だと、父はレーアを強く説得した。そして彼女は父を信じ、心の中にある自分の憧れを信じた。

そして――父の熱意はついに、レーアをウリセスニアロへ嫁がせることに成功したのである。

低く力強く、しかし淡々とした声の人だと、レーアは最初に思った。結婚式当日の、神殿の中でのことだ。神官の前にローブ姿で立つ新郎新婦は、自分の名と結婚の確認を己の口で言わねばならない。

「ウリセスニアロ、この結婚を承諾する」

「……ヴァレーリアンコンテ……結婚を承諾します」

彼のよく通る声と比べて、自分の声がとても頼りなく感じた。

力強いのは、声だけではなかった。式を済ませ、神殿を出る時には、手をつながなければならぬ。ウリセスはぐいぐいと、彼女の手を引いて歩いた。歩く速さこそ、彼女に合

わせてくれているが、少しもほんやり出来なかつた。おかげでレーアは、つないだ手とロープの下に、すっかり汗をかいてしまったのだ。

彼の家に着いてからも、ウリセスのペースだった。初めての場所で、どうしたらいいかわからない彼女に、ロープを脱ぐように言い、次に食事をするように言う。

物事を計画的に考える知性と、合理的な行動を良しとしている信条が、彼の放つ言葉から垣間見えた。

食卓で彼の一日の予定を聞かされ、レーアはそれを一生懸命頭の中で繰り返した。そうしなければ、不慣れな内は間違えてしまいそうだったのだ。

虚空を見上げ、彼の言葉を思い出そうとしている彼女が何をしているのかもウリセスにはお見通しのように、「間違ひなく記憶するには、声に出して復唱するのが効果的だ」と、軍隊らしい方法を提案する。

おかげでレーアは、まず食べかけのパンを呑み込んで水で口の中を整え、それからもう一度、彼女の夫の一日の行動を声に出さなければならなかつた。復唱し終わると、ウリセスは小さく頷いた。どうやら、間違つていなかったようだ。

「家のことは全て任せる。いままでは、家政婦を雇っていた。俺は、家の中のことは何も出来ん」

大丈夫か、と確認される。

「は、はい」

こくこくと頷く。最初から、そのつもりで嫁いできたのだ。しかし、こうやって改めて言葉にされると、どきどきしてしまふ。ウリセスという男の期待に、応えられるだろうか、と。

非常に、理想の高い男のように思えた。彼に比べれば、レーアは愚鈍と非合理の塊にすぎない。そんなウリセスの要求に、自分が応えきれないと分かつた時、彼は一体どんな態度を取るのか——それが分からないのだ。蔑まれるのか罵倒されるのか、はたまたため息をつかれるのか、呆れられるのか。

レーアは、出来る限り一生懸命頑張りますとしか言えなかつた。当たり前だが、戦場とは無縁の女である。たとえ、彼女が家事で少し失敗したところで、人が死ぬ可能性は限りなく低い。しかし、多くの命を預かってきた彼は、そんな甘つたれた考えで生きているはずがない。

一生懸命頑張ります、では駄目だと、レーアはこの時強く覚悟した。彼が満足する結果を出そう、と。強い男の妻が、ほんやりしてられるはずがない。彼女もまた、夫のために強い妻にならなければならぬのだ。

「……メシは終わったのか?」

そんな彼女の覚悟を知ることもなく、ウリセスは濃い茶色の瞳を彼女にまっすぐ向ける。祝いのケーキとパンを少し食べ、果実のジュースを飲んだだけだが、もはや今日の彼女は精神的な許容量きよようりょうが一杯で、これ以上食べられそうになかった。「はい」と頷くと、ウリセスは食卓を立ち上がった。

「片付けは、明日でいい。少し早いけど、寝室に行く」

まだ座ったままのレーアは、彼が何を言っているのかすぐには分からなかった。思わず、「私もですか?」と聞き返しそうになって、慌てて口をつぐんだ。

新郎と新婦が、明日の朝まで一歩も家を出てはならないのは、「そういうこと」なのだ。母に教えられていたではないか。

「とにかく、ウリセスさんに全とお任せしておけばいいのよ。嫌がったりしないようにね」と、彼女の母はそう締めくくっていた。

はいという自分の声が掠かすれてしまい、顔が熱くてしょうがないことに気づく。何とか立ち上がったが、緊張きんちやうのあまり足が震えてしまう。足どころか、手も震えていた。

「……俺が怖いかな?」

そんな彼女の態度に、ウリセスが目つきの悪い目元を更に険ゆがしく歪めた。それだけは違

うと言いたいのに、口がうまく動かせず、ただレーアは首をぶんぶん横に振った。あまりに勢いきほ良く振ってしまったせいで、眩暈めまいともよるけともつかない事態が発生し、食卓に手をつけて自分を支えなければならなかった。

「……大丈夫かな?」

視界を整えようとして、気づいたら声が真横にあった。びっくりして顔を上げると、いつの間にかウリセスがすぐ側そばにいて、その手を伸ばしていた。彼の手は、レーアを人形のように簡単に支えてまっすぐ立たせてくれる。

ああ、そうだった。

そこで彼女は、記憶の中にいるウリセスⅡアロという男を引っぱり出した。足手まといの彼女の父を背負って歩いた強い男。

彼は、戦場で華々しい戦果をあげることを良しとする猪武者ぶじむしではない。人を助ける道を知っている男である。それが彼の心の「強さ」であり、その心を現実ひまに出来るのが、彼の身体からだの「強さ」なのだ。

「だ、大丈夫です」

そんな彼に比べれば、自分の身体は間違いなくひ弱だと、レーアは痛いほど感じた。

「もっと食った方がいい」

ウリセスは眉をひそめるように言った。やせた女は、好みではないのだろう。

「は、はい。明日からしつかり食べます」  
 「今日は特別なのだ。レーアとて、いつもは頭を振ったくらいでよろけることなどない。憧れの男との結婚式があり、朝から支度と緊張でほとんど何も食べていない中、手をつないでこの家まで歩いたせいだ。」

そんな彼女をウリセスは少し疑わしい目で見た後、「歩けるか？ 抱えていくか？」と問いかけた。

「歩きます」

大丈夫ですと、レーアは強い意志で頷いて答えた。

「そうか」と、ウリセスは言葉を返したが、彼女の手だけは握ったまま、二階の階段へと向かったのだった。

### 3 寝過ごした女

結論から言えば、レーアは翌朝五時に起きることが出来なかった。

新婚初日から、見事に寝過ごしてしまつたのである。ハッと飛び起きた時には、階下の柱時計が、七回鐘を鳴らしていた。広い寝台には、当然のごとく彼女一人だけだ。

何の衣服も身に着けていない、夫以外の誰にも見せられない姿で、レーアは一人真つ青になる。落ち着かない目で周囲を探すと、彼女の服は寝台脇の椅子にかけてあつた。そんなことをした記憶は彼女にはないので、ウリセスがそうしたのでらう。そしておそらく間違ひなく、隠されてはいるが、そこに彼女の下穿とばきもあるはずだ。そんなものを夫に片付けさせたのである。

恥ずかしさのあまり死にたい気持ちで、これからどうすればいいのか考えがまるでまともならず、彼女は掛布かぶで胸元を押さえたまま、混乱の沼の中であがいていた。

「ああ、起きたか」

そんな時に、ウリセスがノックもなしに扉を開けて部屋に戻ってくるものだから、更にレーアの血の気が引く。勿論もちろん彼の寝室でもあるのだから、ノックなどいるはずもなかった。だがそれは、レーアの小さな心の臓ちんを、口から飛び出させるほどの威力があつた。

シャツ姿の彼は、手に練習用らしい木刀を持っていた。既に鍛錬を終えたようで、その肌には軽い汗が見て取れた。昨日復唱した予定通りなら、これからウリセスは朝食を取ることになる。あと一時間で、仕事が始まるのだから。ここまでのところ、彼女は見事に役



立たずだった。

「も、ももももも」

たった一言、「申し訳ありません」が、どうしてすぐに出ないのか。そして、どうして身体が動かないのか、レーアはがゆい思いを味わった。

「ああ、いい。昨日のメシが残っているから、それを食って仕事に行く」

彼女の馬鹿馬鹿しい状態を気にする様子もなく、ウリセスはさっさと着替え始める。彼用のクローゼットから軍服を引っ張り出す、がっちりとした背中を見ながら、彼女は夫の期待に、最初から応えられなかった自分を恥ずかしく思った。

とにかく、こんなところでグズグズしているわけにはいかない。既にしくじったことは、取り返しがつかない。これからの行動で挽回する以外、もはやレーアには何の手立てもないのである。ちようど、ウリセスが背中を向けていてくれるのだ。こんな姿でも動き出せる、数少ない機会だった。

しかし、掛布で身体を隠したまま寝台の端はににじり寄ろうとした彼女は、足と腰と、非常に口に出しにくい場所の痛みで、バランスを大きく崩した。

「あ……！」

何とかがとつさに片足を床に下ろしたので、無様ぶざまに転げ落ちることはなかったが、大きく

前につんのめって止まる。落ちかけたことによる驚きで生まれた心の乱れを、彼女はしばらく固まったままやり過こそうとした。

「……」

しかし、レーアは視線を感じて血の気が引いた。そおおおと首だけを回して、クローゼットの方を見ると、ウリセスもまた白いシャツの胸元のボタンを留めかけたまま止まってこちらを見ている。

ひどい体勢になってしまったため、彼女の身体を隠していた掛布は、おなかのあたりにひっかかっているに過ぎない。薄い胸元も細い脚も、何も隠されていなかった。

「あつ……！」

羞恥しよちに振り回され、レーアは思わず不安定な体勢のまま、両手で掛布を引き上げようとしてしまった。だが、かろうじて尻の端が寝台にのっかっていただけの彼女の身体が、そんな恥じらいを許してくれるはずがない。尻お尻から無様ぶざまに落ちて、床にへたりこむ羽目になるだけだった。

ああもう泣きたい。このまま消えてしまいたい。

恥ずかしいなんて言葉では済まされない情けなさが、レーアを包み込む。お尻も痛い、心の痛みはそれ以上だった。掛布のほとんどは寝台から垂たれ下がった状態で落ち、彼女の

横に寄り添ってくれるだけ。とてもレーアの心の痛みを、癒してくれそうになかった。

「深呼吸をしろ」

シャツのボタンを留め終わったウリセスが、ズボンの中に裾を突つ込みながら近づいてくる。彼女の裸ごときには何の動揺も見せないその姿に、逆に「そんなものなのか」と、レーアは少し冷静になった。こんなやせた女の身体には、さして興味もないのだろうと彼女は思った。

横に落ちた掛布を半端に握ったまま、レーアは大きく息を吸う。それを吐き出す頃には、夫は袖口のボタンを留めながら、目の前に立っていた。

「立てるか？」

ボタンの留まった、その手を差し出される。

「だ、大丈夫です」

既に無様の限りを尽くしているのだが、自力で立ち上がるくらいはしなければ、もはや立つ瀬がない。すぐ後ろにあるベッドの端に手をかけて、レーアは自分の身体を立てた。彼女に優しくない掛布を引つ張り上げ、出来るだけ身体を隠そうと無駄な努力を試みる。

「な、情けない姿をお見せして、申し訳ありません。いまから、きちんと致します」

もはや取り返しがつかないほど呆れられていたとしても、明日からなんて悠長なことを、

彼に言えるはずがない。借金が百万ダリあるのと、十万ダリあるのでは大違いだ。借金をするとしても、なるべく小さくする努力をしなければ、この家に彼女の居場所はなくなってしまうだろう。

「あ、ああ……まあ今日はいい。昨夜は、無理をさせたしな。俺は女のことはよく分かんが、血の匂いがしたから痛かっただろう」

血の匂い——そんな動物的なことを言われて、再び彼女を羞恥が包む。確かに痛かった。更に、ウリセスという男は非常に体力があり、それと同様の精力もあった。「もう一回だ」と言う言葉を三度聞いた辺りで、レーアの意識はあやふやに途切れていた。

「とりあえず、ちゃんとメシを食え」

結局、彼女の体力が少ないという結論に落ち着いたのだろう。ウリセスは、そう締めくくってから椅子にかけられていたレーアの服を全て抱えると、頼りない彼女の胸へと押し付けた。掛布から手を離しても、それがレーアの細い身体を隠してくれる。

「俺がいると着替えにくいだろう。先に下に行っている」

そう言っつてウリセスは、軍服の上着とベルトを引つつかみ、大きな足取りで寝室を出て行った。気がつけば、レーアは寝室に一人になっていた。

はああああ。

遠ざかる足音に、彼女を長く痛めつけた緊張と羞恥の糸が途切れ、レーアはへなへなとベッドの端へと座り込んだ。しかし、その心に多くの安堵があるわけではない。どちらかというと、不安だらけだった。

初日からこんな有様で、自分は本当にちゃんとやっていけるのだろうか、と。

着替えを済ませ、髪を整えてから急いで食堂へと向かうと、テーブルの上は昨日のままだった。

ウリセスは、残りもののジュースの瓶を傾けて、新しいグラスに注いでいた。パンが減っているので、もう朝食は済ませたのかもしれない。

「今朝は……見苦しいところをお見せして、申し訳ありません」

どんなに体裁を整えたとしても、もはや彼には何の意味もないだろう。それでも、知らん顔をしていることも出来ずに、レーアは首まで赤くしながら自分の夫に詫びた。

窓から朝日の差し込む朝の明るい食堂は、レーアの羞恥を何ひとつ隠してはくれない。彼女をちらと見たウリセスは、大きく反応するわけではなく、自分の向かいの席を指すだけだ。

「いいからメシを食え。もう少し、肉をつけろ」

何もかもを見られた男に肉をつけろと言われるのに、レーアは物凄い威力を感じた。いまの彼女の身体が、貧相だと言われているも同然なのだ。恥ずかしさを消せないまま、彼女はうつむいて席につく。何の言葉も見つけられないまま、もそもそ朝食をとっている。「そろそろ行く」と、向かいのウリセスが立ち上がった。

「お、お見送りします！」

慌てて立ち上がり、レーアは彼の後を追う。見送りくらいちゃんとしなければと思った彼女に、歩き出したウリセスは肩越しに振り返って、何か言いたげな顔をしたが、そのまま前を向いた。そのしつかりした背中を追いかけると、玄関まですぐにたどり着く。

外につながる両開きの扉の片方を彼が押し開けると、朝日が柔らかく玄関先を照らす。一歩踏み出してそんな光に包まれたウリセスは、ちらとだけレーアに視線を向けた。

「行ってくる。玄関の鍵は閉めておけ」

「はい、行ってらっしゃいませ」

ぎこちなく微笑むことしか出来ないレーアを、少し心配そうに見た気がしたのは——きつと、これまでの彼女の至らなさが原因なのだろう。

#### 4 荒野を駆け抜けた男

男として正直に言わせてもらえば——悪くはない。それが、ウリセスの結婚に関する感想だった。

女というものにさして関心のなかった彼は、たった一晚の間だけでも、男との扱いの違いにいろいろと戸惑うこととなった。ただ、何事にも彼に比べてゆつくりな新妻レーアだったが、不思議なことに彼をイラつかせなかった。おそらく、まったく自分とは違う生物だと、本能的にウリセスが察知していたおかげだろう。彼が獣を食らう肉食獣ならば、彼女はどう見ても草を食む草食獣なのだから。シカに肉食になれというのは、彼でさえも門違いだと分かる。

また、都の実家に住んでいる彼の妹と比較すれば、レーアは非常に「まとも」に見えた。身近な女に問題があったため、女性全般への基準が下がっていたのかもしれない。

それはそれでいいのだが、彼と違うからこそ、心配になる部分もある。軽すぎるし細すぎるので、そう遠くない先に彼女を壊してしまいそうな気がするのだ。

実際、昨夜もそうだった。彼女が新枕で糸が切れたように気を失った時は、さすがの彼も驚いて、呼吸の有無を確認してしまったほどだ。幸いにして、妻の呼吸は途切れてはいなかったが。とにかく、初日からこんなことで本当に大丈夫かという心配は、確実に生まれていた。

誤解のないように言えば、彼は別に女なしで生きていけない性質でも体質でもない。友人や上官に、都でいくらかの悪い遊びを覚えさせられたものの、一時の快楽にはさして執着していなかった。彼は、目もくらむような短い快楽の後、荒野に放り出される空しさ、正直好きではなかった。それよりも、剣技を磨いて、見事な技量の相手と激しい鏢迫り合いをしていた方が、よほど長く高揚出来ることを知っていたのだ。

そんな彼は、羞恥に小さく震える女を抱いたことはなかった。そして川を流される木切れのごとき頼りない女にしがみつかれ、痛い思いをさせているウリセスに対し、それでも頼れるのは自分だけしかないのだと体現されるのは、何ひとつ悪い気はしなかった。

戦場にいたせいで、微かな血の匂いにも敏感なウリセスは、彼女の身の内からそれを嗅ぎ取った時、彼の中の獣が爛々と目を輝かせたのを知った。夫婦としての義務をこなすだけのはずが、気がつけば彼は、空しい荒野を駆け抜け、幾度もレーアを食っていた。

朝五時。定刻通りに目を覚ましたウリセスは、隣の女が死んだようにピクリともせず

まだ眠っているのを見て、吐息を落とした。自分が結婚したという事実と、隣の女に昨夜してしまった仕打ちの両方が、そこにあったからだ。

眠る彼女の顔に絡む前髪を、無骨な指先でそっと払ってやるが、身じろぎもしない。余程疲れているのだろう。

ベッドの下に散らばっている衣服を、暗い中でより分けたりしたのも、生まれて初めてだった。鼻のよく利く彼は、自分の服や、何より自分自身に、レーアの匂いがついているのを感じる。

「食い扶持が一人増えるだけで、昨日とさして変わらない日々があるのだと、どこか思っていた男は——それが間違いであることを知った。

彼女をそのままに、ウリセスは部屋を出て奥庭で木刀を振るう。奥庭は、家に住む者の生活のための庭だ。周囲を高い塀で囲まれていて、外から気楽に覗かれることはないそこには、釣瓶式の井戸や物干し場がある。塀の隅には、内鍵のついた鉄の扉がひとつ。もしもの時の脱出用なのだろうが、この平和な町では使う必要もなかったらしく、いまでは錆びている。

そんな誰の目も届かない早朝の奥庭で、ウリセスは架空の敵を脳裏に浮かべながら、実戦の流れを繰り返していた。左遷されてからこつち、なかなか対等以上に訓練し合える相手もおらず、彼は自分の内側に煙りがあるのを感じていた。その煙りの一部が、昨夜レーアに対して飛び出してしまったのだろう。

雑念を木刀で振り払い、彼は鍛錬に打ち込む。そうして心を平穏に戻してから、仕事に行く準備のために寝室に戻った。そんな彼を待ち受けていたのは、慌てふためく妻の、あられもない惨状だった。おかげでウリセスの精神風景は、再び穏やかとは言いがたいものに変わってしまう。

そそっかしいのか、恥ずかしいのか、緊張しているのか。はたまた、その全部なのか。レーアは、浅い池であることに気づかずに、ジタバタと溺れている者のようにも見える。従軍一目的の新人兵士などに、時折こいう性質の人間がいる。頑張りうと肩に力を入れすぎて、空回りしてしまうのだ。

「深呼吸をしろ」

落ち着いて周囲を見回せ。ここに敵はおらん。

ここは軍の訓練所ではなく、ましてやレーアは軍人ではない。しかし、それ以外の人の扱いをよく知らないウリセスは、同じ方式を取るしか手段がなかった。

豊かではないが、昨夜彼が愛した素肌胸が小さく隆起した後、長い息が吐き出される。それでようやく、彼女の頬に赤みが戻った。少しは落ち着いたようだ。